



京都府大広報

2012.10

No.170



巻頭座談会

『京都府立大学の明日』

～前を向いて、これまでの4年間を総括してみよう～

①

CONTENTS

各学部・研究科の取り組み

文学部 ⑥ 公共政策学部 ⑦ 生命環境科学研究所 ⑧

トピックス ⑨ / ニューフェース ⑪ / イベント情報 ⑫

<http://www.kpu.ac.jp>

■巻頭座談会

『京都府立大学の明日』～前を向いて、これまでの4年間を総括してみよう～

平成20年（2008年）に京都府公立大学法人が設置され、京都府立大学は文学部、公共政策学部、生命環境学部に改編され、今春、最初の4年間が終わったところです。この間、京都府立大学がどのように成長したのか、また、「京都府立大学の明日」について、渡辺学長を囲んで語りあつていただきました。

■座談会メンバー（順不同、敬称略）

渡辺信一郎（学長）、東あかね（副学長・地域連携センター長）、野口祐子（文学部長）、吉岡真佐樹（公共政策学部長）、牛田一成（生命環境科学研究科長）

はじめに

■渡辺 まず、高校生がうちの大学にどれくらい憧れているかをご紹介します。リクルートの調査では、2010年に関西エリアの全大学でベスト20入りをしました。11年も20位。今年はちょっと下がりましたけれど。男女別では男子は20位に入っていますが、女子は10年は16位、11年は同率で17位。うちの大学は女子学生が約6割を占めている実態をよく反映しています。

もう一つ、2年毎に実施している府大生の生活実態調査があって、昨年の調査では、大学を選択した理由に、20パーセントくらいが「オープンキャンパスで印象がよかつたから」と答えています。むろん「公立大学だから」というのは30～40パーセントを占めてずっと一番です。「京都だから」「京都で学びたかったから」というのがおおむね2位と3位。さらに、「教育・研究の内容が充実しているから」が続きます。オープンキャンパスを理由に挙げた学生は、05年の調査ではたった3パーセントだったんです。おそらく先生に接して話を聞いたり研究室を訪問したりして、好感を持ってもらったのかなと。

■東 オープンキャンパスにおいてになった方の数は、今年は保護者も含めて3500人でしたか。開始当初と比べたら3倍以上になっていますね。



渡辺学長

部全体、それから私の学科の学生も、「学ぶことが楽しい」といっていますね。文学部については改組後、学べるバリエーションが、たしかに増えました。それと、少人数教育が実現できているということが、「楽しい」といえる大きな理由かなと思います。

■吉岡 公共政策学部は福祉社会学部を連続的な形で改組・改編して学部としての幅が広がり、それから特に自治体とのつながりも広まって、非常に学生は活気づいていると思います。

■東 私が14年前に本学に来たころは、5月の連休後には学生の出席率が落ちていました。したことへの対策もあって、「朝ごはんをしっかり食べて授業に出ましょう」と朝食会の取り組みを始めました。3～4年前からは連休明けも出席率が高いままなんですね。朝食会も今年は驚いたことに全員出席。学生はもとからまじめだったとは思いますが、さらにまじめ化したように私自身は感じています。

■野口 朝食会は非常におもしろい取り組みだと思っています。

■東 生命環境学部だけでなく、公共政策学部と文学部の学生さんも受講しています。

■渡辺 もともと東先生のところの学生さんは目的意識が高いですよね。

■東 生命環境学部になり、「食と農」に関する科目が受講できるようになったことで、学生さんの視野が広がって、教育が充実した点があると思います。社会全体の食生活に関する関心が高まって、管理栄養士という職業への関心も、社会から求められている期待も高まっています。

■牛田 世代でいいますと、第2次ベビーブームの世代というのは、やはり激烈な競争の中で生きてきた学生ですから、非常に個性的だった印象がありますね。それを過ぎて、道を切り開いていくという気

この4年間の学生の変化

■野口 大きく変わった印象はありませんが、文学

概が、年々、少し弱くなっているような気がします。就職活動も含めて、学生の自己主張をどうサポートしていくかという課題があるような気はしています。「絶対自分は負けないはずだ」と自信を持つような仕かけを、何か。

■野口 あまりに居心地がよくてちょっとぬるま湯的状況というか。少人数教育は利点ですが、反面、和気あいあいとし過ぎて、一歩抜け出そうというがめつさが出てこないということが、若干マイナスとして働いてるのかなと思います。

■吉岡 教師の多くは他大学に非常勤講師に行ってますが、やっぱり本学がいちばん教えやすいし、想定したとおりの反応がくるという話をよく聞きます。

■渡辺 学力はかつてより高くなっているでしょう？

■野口 「難関大学」という評価が定着しつつありますね。

■吉岡 ただやはり規模が小さいので、大規模私学などと比較して少し埋もれてしまっているところがある。それが学生にとっては少しさびしいようですね。

■渡辺 学生生活の充実度について尋ねると、80パーセントを超して満足度が非常に高い。

■野口 クラブ・サークル加入率も80パーセント以上ですね。

研究成果および地域との結びつき

■渡辺 例えば、各種の賞の受賞者の数がものすごいですね。院生もこのごろたくさん受賞しています。

■牛田 うちの研究科では法人化以降、科学研究費助成の採択数と助成額がほぼ倍になっているんですね。研究水準の向上を明瞭に示していると思います。

■渡辺 受託研究とか奨学寄附金など外の目を入れた研究の評価も大幅に上がっていますね。

■野口 学部を超えての共同研究で、大きなプロジェクトが動いてるというのは、法人化以降の新しい特徴です。異文化共生のプロジェクトをはじめ、国際京都学につながる研究も複数、動いてますし。

■吉岡 公共政策学部のほうは、この4年間は地域貢献型特別研究（ACTR）とか京都政策研究センターの活動として、京都府やいろんな市町村とタイアップ

した研究が格段に増えたと思います。院生なども巻き込んで、より連続的な展開にしたい。

それと、公共政策学部は前身の福祉社会学部時代から、例えば修士の卒業生が幹部候補として刑務官となったり、あとは保護観察官とかですね、一見マイナーな世界なのですが、それぞれの業界ではマイナーな人脈を築いていることにも注目してほしいですね。

■渡辺 生命環境学部も府南部地域にいろんな形で入って実習的な教育をやってると思うし、教養教育の中でも環境共生教育演習ということで、北と南へ学生が行っています。

あと、感じるのはシンポジウムがすごく増えたということです。



野口文学部長

■野口 府民に、府大がどういう教育・研究をしてるかを見てもうには、シンポジウムや公開授業をまめに開催することが大事だと思います。文学部が定期的に開いている日中の演劇シンポジウムがありますが、昨年は410名も集まりました。

これは京都在住の方の知的関心が高いということも示しています。

■吉岡 京都政策研究センターでも、本学の紹介を重要なものと考え、定期的な取り組みをしています。ただし、まだまだ充実させていく必要があると考えます。

■渡辺 お茶を中心とした宇治田原町との関係などもありますね。

■牛田 宇治田原町とのつきあいは、かれこれ10年になるもので、いろんな形に広がってきた経緯があると思うんですね。先方も積極的に大学のリソースを使おうという意識を強くお持ちになっているから、前向きに物事が進んでいくやすいんです。



東副学長・地域連携センター長

■東 包括協定を大学と結んでいる市町が3つあります。宮津市と長岡京市と宇治田原町です。地域貢献型特別研究という名前ですが、私たちの立場からは、地域の住民、行政、自然、社会の中から学生が学ばせ

ていただいている。今日も丹後に学生が出かけて、学校給食に鹿肉を利用してもらう取り組みに参加していますし、宮津市では地元の食材を使った食育をしたり、長岡京市、精華町や南丹市では、妊婦さんの食生活の調査から、健康増進をめざす研究をしています。

■野口 文学部でも今年6月9日に宮津市教育委員会との共催で「宮津の歴史・景観とまちづくり」というシンポジウムを行いました。歴史的な景観を歴史史料から掘り起こしたり、石灯籠などの文化遺産の調査を歴史学科の学生が行うという教育・研究での連携です。宇治田原町については、宇治茶の歴史を研究するという形でかかわらせていただいています。

■渡辺 国際京都学センターの準備的な取り組みでもあるし、今後そちらの展開をしていかなければならぬですね。

■東 宇治田原町の町長さんにお会いしたとき、「宇治田原町全体を、府大のキャンパスの一部と考えてください」とおっしゃいまして、驚きました。

■牛田 京都というと、京都市内の話が中心になりますが、府の北部や南部のコミュニティーにどうコミットしていくかは、大学としてかなり重要なと思います。そういう意識はうちの学部の、いわゆるフィールド的な研究をしている者は、もともと持っていたと思うんですけど、この間の取り組みで方向性がかなり明確になってきた印象があります。

国際交流の現状と課題

■渡辺 中国の西安外国语大学との交流—これはもともと文学部との関係で行っていますが一が30年間。次は雲南農業大学との関係で、ちょうど10年くらいです。法人化以前はその2つだけだったのが、今は9つに増えました。でも全体的に見ればまだまだ。組織的にもきっちり構築していくといけません。緊急の課題だと思っています。

■東 食保健学科においても、受け入れも送り出しあるこれからです。特に、和食を世界に発信していくと考えていますので、手始めに韓国とか東アジア地域に出かけていくような人材を養成したいと考えています。

■野口 青地伯水准教授が昨年度から始められた独レーゲンスブルク大学での海外研修プログラムは約20名が参加して、学生の充実度が断トツに高い。ただ、引率する教員の精神的肉体的な負担が大きいので、国際化センターなりを作っていただいて、そ

こで準備をするという体制を組めないかと思うのです。

■吉岡 公共政策学部の交流で実績があるのは上海交通大学ですけれども、今年は韓国の京畿開発研究院というシンクタンクと協力して本学でセミナーを開きました。

あとは台湾とか東アジアを中心に行きたいと思います。特に私のところは教員・院生レベルでの交流を強めたいと思っています。

■野口 学生の交換留学をぜひしたい。ただ、うちの学生が西安などに行った場合は宿舎などを提供していただけますけれど、逆のケースで、うちにはそれがない。それが大きなネックになっています。

■渡辺 交換留学制度、海外での語学研修への要望は、一時は落ち込んでいたのですが、また上向きになっている。学生の希望が相当高いんです。応えられるような方策を作っていく必要があると思います。

■野口 西安外国语大学とは教員の派遣交流を続けてきましたけれども、毎年2名の学生を編入学で迎えるようになったのは改組後のことです。そしてこの3月に初めての卒業生を出したのは、大きな一歩ではないかと思っています。こちらの院生が日本語教師として教える経験を持たせていただいているのもありがたいことです。

■牛田 雲南農業大学とは、3・4回生の「技術中國語」という科目で、10日間から2週間の日程で現地の実習を引き受けていただいている。毎年学生5~15人が参加して、すでに5回ほど実施しています。その代わりに、先方から院生を毎年2名、引き受ける。すでに修士を修了した学生が3人います。

最近の学生は外国へ出て行こうというインセンティブが低くなっているところがありますから、なんとか「世間は広い」ということを見せるというか、同世代の向こうの学生と、長時間にわたっていろんな話をするこの意義を考えさせたいと思っています。

明日の京都府立大学

■渡辺 これからは、きれいなキャンパスにしたいですね。高校生が憧れるキャンパスを作るというの



吉岡公共政策学部長



が私の課題だと思っています。

■牛田 駐車場は、芝を蒔いて緑に変えたいですね。芝はどんな種類がいいかといったことは、うちの学部でも対応はできますし。

■野口 せっかく京都で学ぶのだから、学生には、何を学ぶにしても、4年間で京都に対する関心を広げて、よく学んでほしい。国際京都学センターでの文学部のかかわりもしっかりとやっていきます。

■吉岡 改組から最初の一世代というのは試行錯誤の部分がたくさんありました。今年からは2サイクル目が始まるわけですが、学部としての求心力を高めつつ、第2ステージに飛躍しようというのが学部のスローガンです。教育・研究体制を全面的に高めるというのと、専門職養成をしていくためのカリキュラム整備をしっかりしていきたい。

■牛田 学部統合のメリットを生かして、デメリットを少なくしていく努力というのは、たゆまず進めていく必要がありますね。具体的に、学生にとってよりよい形を目指して。

あと、100年以上前に学校が始まった根本的なミッションは何だったかということを、振り返る必要があると思います。応用実学という観点で学校ができるという経緯は、非常に重要なところです。学問の新しい展開をいかに実学的な方向に取り入れていくか。そこを基盤に、応用的な部分を考える。我々が組織としてどれくらい柔軟に対応できるかの鍵になってくると思います。



牛田生命環境科学研究所科長

■東 オリンピックの「より速く、より強く、より高く」にちなんでいうと、「より安全で、より健康に」そしてより速くではなくて「より堅実に」、地域と連携しながら教育と研究を進めていきたいと考えています。

■渡辺 この前の基本構想委員会でも語ったことですが、堅実という学風をしっかりと持つ。そして堅実な学生を社会に送り出していきたい。すべてをそこに収れんできるような形でいけたらというふうに考えます。

企業もうちの堅実な学生を探ってくれたら、ほんとうに重宝すると思うんです。

■野口 採らないのはもったいないことですよ。口ばっかりうまいといったタイプではなくて、きっちりと仕事のできる学生たちなんですから。

■東 地域、企業、教育など多方面で府大の卒業生さんが活躍していますよね。

■牛田 卒業生の動向を追いかけるメディアがあつてもいいような気がします。

■渡辺 同窓会との協力などを図りたいですね。今日はどうも長時間、ありがとうございました。

(紙幅の都合で、当日の座談会の内容を圧縮、あるいは割愛しています。)

■進行

広報誌編集部会長
文学部教授 赤瀬信吾



文学部

日本と中国の古典演劇比較研究の歩み～シンポジウムの成果を通して～

日本・中国文学科 山崎 福之 教授

文学部日本・中国文学科を中心とした日本と中国の古典演劇比較研究は、双方の共通点と相違点を明らかにすることを目標に進められ、平成18年2月国際シンポジウム「日本と中国の演劇空間」の開催、19年度地域貢献型特別研究（ACTR）による20年2月シンポジウム「しらべとしぐさ」の開催と続き、日本の能と中国の崑曲の両者を能舞台で上演した上で、その特徴を検証するという画期的な試みも行った。

それらシンポジウムの成果をさらに発展させた書を『能楽と崑曲—日本と中国の古典演劇をたのしむ—』（汲古書院 平成21年3月）と題して出版し、公開している。

さらに22年度ACTRでは、狂言と崑曲との比較を行った。ヨーロッパの古典演劇を比較の視点に加えて、世界の演劇における位置を考察することも視野に入れたのである。

そして23年度ACTRでは、24年3月11日金剛能楽堂においてシンポジウム「笑いとしぐさ—世界無形文化遺産の狂言と崑曲を考えるー」を開催した。崑曲に不可欠な器楽の最高レベルの奏者による合奏と、狂言と崑曲の双方のしぐさの特徴の実演による比較を行った後に、崑曲の「下山」と狂言「お茶の水」をそれぞれの解説の後に上演した。そして最後に双方の上演を振り返って、さらなる検証の視点を展望した。

こうした取り組みの積み重ねによって、各々の歴史的な発展や変容、歌唱と小歌のしぐさとの関わり方、笑いにつながるしぐさの意味、幅広い見立てのしぐさの展開、劇の展開に合わせたセリフの変化（特に待遇表現や語種の変化）などが明らかとなり、能楽と崑曲、各々の研究と相互の比較研究から双方の古典演劇全般の比較研究へと発展させていく展望が開けたことが大きな成果であった。日中双方の古典演劇の特性を様々な角度から検証していくという、この比較研究の発展は疑いないと言えよう。

実演を含むシンポジウムは、一般府民の高い関心を呼んでおり、これまでの三回はいずれも満席状態で、事後アンケートでも圧倒的多数の方から、継続しての開催を望む声が寄せられている。京都に相応しい取り組みとして、今後の展開を期したい。



日中双方の演者によるまとめの談話の場面

大英博物館の古墳出土資料調査から

歴史学科 菱田 哲郎 教授

昨年より機会があつてロンドンにある大英博物館のアジア資料室で調査をおこなっている。今年はロンドンオリンピックが開催されることもあり、このような取り組みがNHKの番組で紹介され、地味な考古資料の調査が衆目のもとにさらされてしまった。それ以来、どのような調査をしているのかという問い合わせを受けることも多くなったので、ここで簡単に紹介しておこうと思う。

大英博物館の日本関係の資料は、ミツビシ・ギャラリーと呼ばれるやや奥まった展示室にひっそりと展示されている。展示品では浮世絵や刀の鐔といった定番の資料のほか、須恵器や馬具といった古墳時代の出土品が多く列べられていることが目を引く。これら古墳資料の大半は、明治の初め来日したお雇い外国人のガウランドが集めたものであり、彼の実地の調査によって得られたものも大半を占めている。ガウランドは大阪の造幣局の技師であり、考古学は余技であったのだが、技術屋らしい几帳面な記録を残しながら、前方後円墳や横穴式石室の調査をおこなった。東大阪市の芝山古墳のように、現在の水準にも耐えうる調査例もあり、日本における近代考古学者の先駆であると評されている。彼の持ち帰った資料は、写真や記録とともに大英博物館にしっかりと保管され今日に至ったのであるが、それらを改めて歴史を知るための資料として使うためには、今日の水準での実測や写真撮影が必要となってくる。そこで、ガウランド・コレクションの全体について整理をおこない、日本各地の歴史を知る資料として使えるようにするプロジェクトが京都橋大学の一瀬和夫教授をリーダーとして実施されることとなったのである。京都府に関わる資料では亀岡市の鹿谷古墳群の資料など、6世紀代の一級の資料が含まれている。一年に一週間ほどの期間をとって、集中して実測や写真撮影をおこなつておこなつており、今後何年かかるか、気が遠くなるような作業である。



亀岡市鹿谷公民館での報告会にて
(左側が筆者、右側が京都橋大学一瀬和夫教授)

昨年の11月には亀岡市鹿谷の公民館で鹿谷古墳群の調査報告会が実施された。明治期にガウランドがこの地を調査したことや、貴重な出土資料が大英博物館に展示されていることは、地元の方々にとっても初耳のこと、地域を知るためにたいへんよい機会になったという感想をいただいた。大英博物館の資料については、エジプトをはじめ世界各地から返還要求が出ているが、日本に関するガウランド資料の場合、今日の学術水準での評価をおこなったうえで、日本を紹介する資料として大英博物館で展示されることに意義があると感じられる。

公共政策学部

周辺地域から日本の公共政策を問う

公共政策学科 川瀬 光義 教授

この国では、「公共政策」と称して、不合理な施策が数多く行われています。なかでも米軍基地や原子力発電所など、いわゆる「迷惑施設」を過疎地域など条件不利地域に押しつけておく施策が最たるものといえます。独立国でありながら外国軍の基地設置を認めること、および原子力発電を推進することは、歴代日本政府の最重要政策でした。したがって、その立地をどうするかは、本来なら全国的に検討されるべき課題です。にもかかわらず、これまで立地の候補地とされた「地元」レベルの問題に矮小化されてきました。その際に「地元」の同意を得るために主要な手段が、「経済振興」のための潤沢な国家資金の投入でした。私の研究課題は、経済的困難という弱みにつけ込んで「国策に協力すれば金をやる」といわんばかりの政策の実態を検証し、こうした資金に頼らない地域政策のあり方を探ることにあります。



その際、沖縄を主な対象とします。なぜなら、1972年の復帰以来展開してきた沖縄政策に、日本の歪んだ地域経済政策の矛盾が集中的に現れていると考えるからです。この間に10兆円をこえる財政資金が投入されてきましたが、40年前に克服すべき課題とされた、①製造業の脆弱さや高失業率などの経済的困難の克服、②米軍基地の過度な集中負担の解消、これらはまったく解決されていません。

沖縄を対象とするもうひとつの理由は、環境と自治がキーワードとなるべき今後の地域政策を展望した場合、沖縄には内発的発展の萌芽が豊富に存在するからです。かつての琉球王国時代以来の自治の伝統、アジア諸国との交流の歴史、そして亜熱帯気候を活かした環境に優しい第一次産業を核とした自然エネルギー開発の可能性などです。

要するに、私は、かつて強引に日本国に編入し、今なお軍事植民地として支配している沖縄といういわば「周辺地域」から日本の公共政策のありようを問い合わせ続けています。

心の測定

福祉社会学科 森下 正修 准教授

私の専門分野は「心理学」です。心理学というと精神疾患やカウンセリングなどの臨床心理学を思い浮かべる方が多いでしょうが、もうひとつ、実験系の心理学分野があります。人に対する実験や調査によって、直接は見ることのできない心のはたらきを「測定」する分野で、私の専門はこちらに属しています。

私が主に研究しているのは「記憶」で、その中でも「ワーキングメモリ」と呼ばれる機能について調べています。ワーキングメモリとは簡単に言うと「何かをしながらの記憶」です。たとえば、文章を読みながら内容をおぼえたり、計算しながら結果をおぼえたりするための記憶で、「情報を処理しながら情報を保持する機能」とも説明されます。



ワーキングメモリに関連する機能を測定する実験課題はいろいろあります（最近はコンピュータ上で行うものが多いですが、写真にはアナログなものを集めてみました）。そうした課題のひとつに、私の主な研究対象でもあるリーディングスパンテストがあります。この課題でやることは「文を音読しながら文中の単語を記憶する」、これだけです。「簡単にできそうだな」と感じられる方には、ぜひ一度実験を受けてみていただきたいです。大人なら3文読んで3単語記憶するくらいが標準で、若い大学生の実験参加者たちも5単語おぼえようとするときは四苦八苦しています。

こうした課題で測定されるワーキングメモリは、心理学の中では比較的新しい記憶概念です。そのせいか、10年以上前、大学院生だった私が研究テーマに選んだときには同僚や先輩から懐疑的なコメントをよく受けました。しかし現在では、ワーキングメモリこそ日常的な活動を支える記憶機能であるとの研究が多数蓄積されて、学術雑誌以外の一般誌やTV番組などでもたびたび取り上げられるようになっており、隔世の感があります。

最近では、「ワーキングメモリの機能を改善するにはどうしたらいいか」という質問を受ける機会が増えてきました。これもまた研究が錯綜していて難しいテーマなのですが、今後私も取り組んでみたいと考えています。

生命環境科学研究所

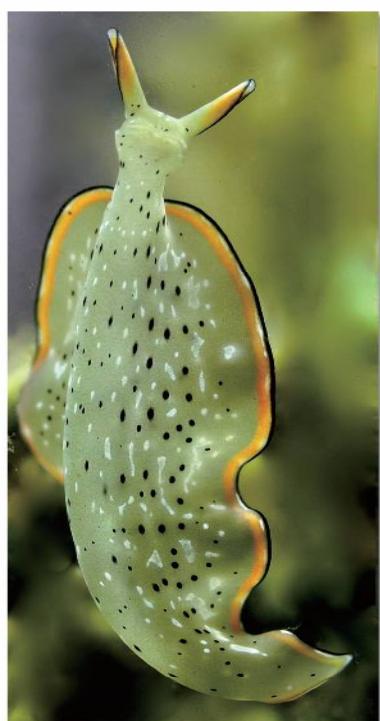
ゲノム進化の舞台裏・・・・・・人も遺伝子も試されるからこそ進化する

応用生命科学専攻（植物ゲノム情報学研究室） 小保方 潤一 教授

動植物の染色体 DNA には、一般に数万もの遺伝子がコードされています。生物が持つ遺伝子・遺伝情報の総体をゲノムといいますが、植物ゲノム情報学研究室では、この膨大な数の遺伝子からなる植物のゲノムが、環境に適応して変動してゆく分子的なメカニズムの解明を行っています。早い話が、ゲノム進化のメカニズムということです。ただ、進化というと、数万年とか数億年といった時間を思い浮かべますが、私たちが主に研究しているのは、実験室のなかで再現できる生化学反応や、せいぜい数世代の植物で調べることのできる分子遺伝学の現象です。

ゲノムが変わるということは、そこに含まれる遺伝子の種類や数が変わることですが、この遺伝子群の変動に大きな影響を与えているのが、異種生物のゲノムの間で生じる DNA の水平転移と、ゲノムという揺りかごの中で生じる新しい遺伝子の生成です。本研究室では、植物細胞のなかにある葉緑体を手掛かりにして、これらのメカニズムに関する研究を進めています。というのも、植物の葉緑体は、光合成細菌の一種であるシアノバクテリアが、15 億年ほども前に真核細胞の中に共生し、その後に進化してできた細胞内小器官です。この進化の過程で、シアノバクテリアのゲノムが持っていた遺伝子の大部分は、宿主細胞の核に転移し、それに伴って、共生細菌（後の葉緑体）と宿主ゲノムにまたがる大規模な遺伝子群の再編成と、新しい細胞機能を支える多くの遺伝子の生成が生じました。ですから、植物の核ゲノムと葉緑体ゲノムの関係を解析すれば、私たちは、遺伝子の水平転移や遺伝子の新生メカニズムについて、多くの知見やヒントを得ることが出来るはずです。

では、本研究室で実際に進めている研究を幾つかご紹介しましょう。一つ目は、葉緑体ゲノムから核ゲノムへの遺伝子転移についてです。この現象は、長い進化の過程で徐々に生じた、と考えられていました。ところが、当研究室の解析によって、葉緑体ゲノムから核ゲノムへの DNA の転移は、従来の予想よりも遙かに高い頻度で、しかも現在でも活発に生じていることが明らかになりました。1 ヘクタールの水田を考えると、葉緑体から核への新たな DNA 転移をもった種類が、毎年数千粒ほど生じていると推定されます。この発見は大きな驚きでしたが、私たちは、この研究をさらに二つの方向に発展させています。



一つは、異種生物間の DNA 転移の研究で、研究対象のモデルに、光合成をするウミウシという小さな怪物（写真）を用いています。このウミウシは、餌の海藻から葉緑体を奪い取って、植物のように光合成をします。この生物と海藻のゲノムを比較したところ、海藻からウミウシへ、遺伝学や分子生物学の教科書には載っていない新しい様式の遺伝情報の転移があることがわかつてきました。これも驚きの発見ですが、もしかしたら、海の中では、餌から捕食者への遺伝情報の漏出が、低頻度で恒常に生じているのかもしれません。

もう一つの研究は、異種生物のゲノムに転移した遺伝子が、どのようにして新しい発現制御機構を獲得するのか、というものです。これまで、タンパク質遺伝子の起源や進化は詳しく調べられてきましたが、それらの遺伝子を発現させる「プロモーター」とよばれる機能配列の出現メカニズムはよくわかつていませんでした。私たちは、植物の転写装置の多様性から研究を始めて、10 年がかりで、この謎を解く新しい突破口を見つけました。現在、その論文を投稿中です。

このほかにも、光る海藻やウミウシの作成、光合成をする有殻アーバー、葉緑体 RNA 編集の分子メカニズム、などの研究に取り組んでいます。これら一連の研究から次第にわかつてきることは、人も遺伝子も、試されるからこそ進化する、ということです。この言葉の意味や、ウミウシ、ペんぺん草などにご興味があれば、是非一度、3 号館 2 階の東端までお越し下さい。

トピックス

■地域連携■

シンポジウム「宮津の歴史・景観とまちづくり」

平成24年6月9日（土）に宮津歴史の館で開催したシンポジウム「宮津の歴史・景観とまちづくり」（主催：京都府立大学文学部、同地域連携センター、宮津市、同教育委員会）は、平成23年度ACTR「丹後・丹波の街道と信仰の歴史——宮津市を中心に——」（研究代表者：上杉和央）の成果を地域に報告できた点に加えて、2つの点で意義深いものとなった。

まず、府大の3学部の教員が地域貢献の場面で連携できた点である。当日は上記ACTRの研究分担者のみならず、昨年度宮津市域を対象として実施された他の2つのACTRの研究代表者であった三橋俊雄先生（生命環境科学研究所）、奥谷三穂先生（公共政策学部・現京都府）にも参加・報告をいただいた。もう1つは民・官・学で協働できた点である。パネル・ディスカッションには3学部の教員のほか、市教委およびまちづくりを行う民間団体からも加わっていたたくよう構成した結果、文化的景観やまちづくりについて、これまでにない多面的な議論を展開することができた。

地域貢献は、いろいろな次元でのヨコの連携が有益であることが確認されたシンポジウムではなかつたかと思う。



（文学部歴史学科 上杉 和央 准教授）

■国際交流■

西安外国语大学代表团が本学を訪問

7月10日（火）、中国陝西省の西安外国语大学の代表团が本学を訪問しました。西安外国语大学は、本学と30年にわたって友好関係にあり、教員を相互に派遣しているほか、西安外国语大学の学生が本学三年次に編入して、卒業時には両大学の学位を取得できる制度や、本学大学院生が西安外国语大学に赴いて、日本語教員として実地の教育に携わる制度も実施しており、長期にわたって活発多彩な交流が展開されています。

今回の代表团は、副書記の王穎氏以下、日本文化経済学院院長の趙萍氏、中国語言文学院院長の張保寧氏、社会科学部主任の李毅氏、体育部主任の王延氏という、西安外国语大学で教育活動に携わっておられる幹部の方々によって構成されています。



代表团の皆さんには、午前9時30分に到着し、早速、渡辺学長以下、事務局長・文学部長及び最近西安外国语大学に派遣された文学部の教員、西安外国语大学からの派遣教員の李忠啓准教授、それに西安外国语大学から派遣されて本学文学部日本・中国文学科に在籍中の学生たちに迎えられました。渡辺学長が流暢な中国語で歓迎の辞を述べられたのに答えて、王副書記からは本学と西安外国语大学とのこれまでの交流に対する感謝の意と、今後の交流の持続・発展に対する期待が述べされました。懇談の後、相互に記念品の贈呈を行い、より一層交流を進展させていくことで合意しました。

（文学部日本・中国文学科 小松 謙 教授）

■受賞情報■

生命環境科学研究所 応用生命科学専攻 松井 元子 准教授

「平成 24 年度栄養関係功労者厚生労働大臣表彰」受賞

長年にわたる栄養士・管理栄養士の養成、栄養指導・栄養教育分野においての学生指導等の功績により、厚生労働大臣表彰を受賞されました。

生命環境科学研究所 応用生命科学専攻 倉持 幸司 准教授

「日本農芸化学会 2012 年度（平成 24 年度）農芸化学奨励賞」受賞

農芸化学の進歩に寄与する優れた研究をなし、将来の発展を期待し得る若手研究者に授与されるもので、「生物活性の探索と解明を指向した有用化合物の合成研究と化学生物学的研究」により、受賞されました。

生命環境科学研究所 応用生命科学専攻 斎田 宏明 講師

「第 53 回無機マテリアル学会永井記念奨励賞」受賞

無機マテリアル学会創立者の永井彰一郎氏を記念し、無機材料に関して優れた研究論文等を無機マテリアル誌に発表した若手研究者に授与されるもので、「遷移金属リン酸塩材料の合成と機能性に関する研究」の発表により、受賞されました。

生命環境科学研究所 環境科学専攻 美濃羽 靖 講師

「森林計画学会 2011 年度森林計画学賞」受賞

森林計画学賞は森林計画分野において、学術上とくに価値が高いと認められる業績を挙げた会員に授与されるもので、「Verification for generalizability and accuracy of a thinning-trees selection model with the ensemble learning algorithm and the cross-validation method」の発表により、受賞されました。

生命環境科学研究所 応用生命科学専攻 武田 征士 助教

平成 24 年度「日本植物形態学会奨励賞」受賞

植物形態学の分野で将来の活躍が期待される若手研究者に授与されるもので、「植物の花弁形成に関わる遺伝子の研究」により、受賞されました。

生命環境科学研究所（生命環境学部）建築環境・設備学研究室の院生及び学生

平成 23 年度「空気調和・衛生工学会近畿支部学術研究発表会奨励賞」受賞

学術研究発表 74 編のうち 7 編が奨励賞に選定され、本学からは 4 編が受賞しました。
(受賞者及び受賞論文)

※回生は受賞時（平成 23 年度）現在

受賞者	受賞論文
夜久 幸希さん (博士前期 1 回生)	家庭用 SOFC-CGS の性能評価に関する研究 その 1 システム概要と数理モデル化
李 明香さん (博士後期 1 回生)	熱・水分・空気複合移動を考慮した建築全体の温湿度環境解析（その 2）建築系と人体系の連成シミュレーション
小林 愛里さん (博士前期 2 回生)	熱・水分・空気の複合移動を考慮した緑陰の数理モデル化と環境評価に関する研究
重森 康太郎さん (4 回生)	太陽光を利用した Smart Eco Energy House に関する研究

生命環境科学研究所 環境科学専攻 博士前期課程 1 回生 木口 なつみさん

日本建築学会「優秀卒業論文賞」受賞

卒業論文「日本租借時代の大連市に建てられた下駄履き住宅に関する研究」により、日本建築学会「優秀卒業論文賞」を受賞されました。

生命環境科学研究所 環境科学専攻 博士前期課程 1 回生 曽根 いづみさん

日本建築学会近畿支部「第 66 回卒業設計コンクール」入選

近畿圏の大学代表作品を対象に、上位 3 名が入選するコンクールにおいて、入選されました。

ニュー フェース

平成 24 年 4 月着任の教員の紹介



文学部 日本・中国文学科 講師 嘴海 伸一 (なるみ しんいち)

<主な研究領域> 日本語学・日本語史

古代から近代・現代にいたる文献資料の読解を通じて、日本語の歴史を研究しています。

特に、漢語の受容と変容を問題にしています。もともと外国語であった漢語が、日本語の中にどのように取り入れられ、それが時代とともにどのように日本の変容を被ってきたのか、を考えています。

古典文学などの文献資料に関わりの深い、京都の地で研究ができる幸せを感じています。どうぞよろしくお願いいたします。

文学部 歴史学科 准教授 阿部 拓児 (あべ たくじ)

<主な研究領域> 西洋古代史

西洋古代史、すなわち古代ギリシア・ローマの歴史を研究しています。より詳しくは、ペルシア帝国が支配していた時代（紀元前 6 世紀半ば～紀元前 4 世紀後半）の小アジア（現在のトルコ）の文化や社会、またそこで興った歴史叙述のあり方に関心を持っています。

わたしたちは小中学生のころから英語を勉強し、イタリアのファッショ・ブランドを身につけ、フランス料理に舌鼓を打ちます。これだけヨーロッパが身近にありながら、依然として日本人にとってヨーロッパは遠い国々です。授業を通して学生の皆さんに、少しでもヨーロッパの魅力を伝えることができたらと考えています。



文学部 歴史学科 講師 向井 佑介 (むかい ゆうすけ)

<主な研究領域> 中国考古学・歴史考古学

京都の市街地は、古代都市・平安京の上にかさなっています。平安京が中国の都城制をモデルとしたことは、よく知られています。かつて京の内外に建ちならんでいた仏教寺院もまた中國から朝鮮半島を経由して伝わったものです。その源流となった中国の都城・宮殿・寺院などのかたち、そこにある思想、それらが造営された背景などをさぐるのが、私の研究です。

「京都で学ぶ」「京都を学ぶ」ということは、京都府立大学の大きな特色をなしています。京都に花ひらいた文化の国際性や当時の人びとの国際感覚について、学生のみなさんと一緒に追究していきたいと考えています。



公共政策学部 公共政策学科 准教授 下村 誠 (しもむら まこと)

<主な研究領域> 行政法

専攻は「行政法」で、行政法ⅠからⅣを担当します。研究テーマは「損失補償の要否基準」で、これまでアメリカの土地利用規制に着目して比較研究してきました。たとえば、マイホームを建てようと土地を購入したが規制によって建てられなくなった場合に、どのような基準を用いて補償の要否を決するのが公正かを研究しています。結局は様々な事実を比較衡量して決するより他ないとしても、考慮要素をより精緻化していくことは可能であり、それが今後の課題でもあります。



公共政策学部 公共政策学科 准教授 藤沢 実 (ふじさわ みのる)

<主な研究領域> 行政と大学、サードセクター、地域との連携・協働についての実践研究、これからの公の領域のあり方の探究

京都府からの派遣教員として、行政とサードセクター等との協働やこれからの公の領域のあり方について研究しています。京都政策研究センターで府大と府を、地域連携センターで府大と地域を結ぶ架け橋となる仕事が大きな役割ですが、その中で、公共政策の勉強がより実践的なものになったり、府や地域が大学の「知」をより一層活用できるようになったり、大学が学びの場だけにとどまらず、主体的に実社会の担い手となるよう、環境整備に取り組んでいきたいと考えています。

公共政策学部 公共政策学科 講師 杉岡 秀紀 (すぎおか ひでのり)

<主な研究領域> NPOと政治・政策、大学まちづくり論、地域公共人材論

この4月から着任いたしました杉岡と申します。専門は公共政策、NPO論、大学まちづくり論で、わが国の大学と地域の連携・協働による公共政策教育における「地域公共人材」の育成とその質保証のあり方について研究しています。前職までのNPO経験、企業経験、行政経験を活かし、「理論なき実践は暴挙、実践なき理論は空虚」というスローガンのもと、現場(Active Learning)を大事にする臨床政策学者、教育者でありたいと思っております。よろしくお願ひします。



公共政策学部 福祉社会学科 講師 朝田 佳尚 (あさだ よしたか)

<主な研究領域> 社会病理学・社会問題論

昨今の「安全・安心」ブームがどのような社会状況から成立したのかを研究しています。これまで主に防犯カメラを取り上げ、その設置に至る経緯や背景について繁華街や農村で聞き取りを行い、現代日本社会の構造と意識の変化を検討してきました。今後は、この動向の裏面をなす犯罪や逸脱を事例として、貧困や家族関係の変化、無縁社会の広がりといった諸問題の様相を確認し、安全・安心と社会的排除が交錯しながら進む現代社会の姿を立体的に描き出したいと考えています。

平成24年7月着任の教員の紹介

生命環境科学研究所 環境科学専攻 准教授 鈴木 健二 (すずき けんじ)

<主な研究領域> 建築計画、高齢者住環境

高齢者施設や児童養護施設、保育施設等、高齢者や子供の居住施設に関する研究を行っています。これらの施設は殆どの学生にとってあまり縁の無い施設かもしれません、何らかの支援を必要とする方々が多数生活しており、今後は家族や友人あるいは自分自身が利用する事になるかもしれません。しかし日本ではこうした施設の居住環境は必ずしも十分ではなく、社会的なストックとして今後どのように整備・改善していくのか、利用する方々の視点に立った計画・実践へと繋げていきたいと考えています。



生命環境科学研究所 環境科学専攻 講師 松田 法子 (まつだ のりこ)

<主な研究領域> 生活文化論・生活美学・都市史・地域史

人と場所との豊かな関係と問題系について、空間・社会・技術・建築・歴史などの生活文化的側面と、風景・景観などの美学的側面から調査研究を行っています。これまでの主なフィールドは熱海や別府などの温泉町で、最近は仙台・新潟・出雲平野などの沿海低地部における都市と集落の調査を行っています。関連して、オランダ北部・北イタリア・南フランスでの共同調査研究も行ってきました。今年度からは、水・地質・地形など人々の生活を下支えする様々な環境条件を対象に取り込みながら、京都府内・近畿における都市や集落の調査研究を展開したいと考えています。

イベント情報

国際京都学シンポジウム

「ユーラシアからみた京都」

日 時 平成24年12月9日(日) 10:00~16:45

場 所 キャンパスプラザ京都(申込不要、入場無料)

(京都市下京区西洞院通塩小路下る(ビックカメラ前、JR京都駅ビル駐車場西側))

京都府大広報 No.170 京都府立大学広報委員会 2012.10 発行

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 TEL. 075-703-5904 FAX. 075-703-5149
Email kikaku@kpu.ac.jp